

---

# 天剣と言われた男

天剣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天剣と言われた男

### 【Nコード】

N1211Y

### 【作者名】

天剣

### 【あらすじ】

神に誤って殺された少年が真つ白空間で会った神様《幼女》に能力もらってネギま！の世界へGOする話。

第一話（前書き）

修学旅行中に投稿

## 第一話

「これなんて状況？」

目覚めてみれば真つ白な場所と土下座している幼女がいた。

「申し訳ありませんでしたあー!!！」

「しかも流暢に日本語を話したと!？」

これには驚いた。

幼女如きが流暢に、しかも日本語を話すとは誰が思うだろうか？

「とりあえず、顔を上げて立ち上がれ幼女。これじゃあ俺がお前に何かしたと勘違いされるだろうが」

「は、はい、すみません……」

そう言つて顔を上げる幼女。

……うん、見紛うことなき本物の幼女だ。

「それで幼女、ここはどこだ？」

「ここはあの世とこの世の狭間です」

「……………は？」

あの世とこの世のはぢぢE……いやいや

「いやいやいやいやいや、何そのテンプレな発言!」

「事実ですよ?だって私が間違っただけで殺してしまっ……あ……」

「ほほう……」

今コイツ何テ言ッタ?

「聞き間違イカ? 幼女? 才前ノ言ッタコトガホントウナラスコシ  
H A N A S H I シヨウジャナイカ?」

「ヒィ……」

「サア、ジンモ……ゴウモ……ナンデモイイカラハジメルトシヨウ  
……」

「い、イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!……!」

↳折檻&幼女の説明↳

「つまり? お前は神様と呼ばれる存在で、自分がミスをして殺して  
しまったから、その責任で俺を転生させてくれると?」

「はい、そうです……グスッ……」

「なるほどな」

それって、まんまテンプレモノじゃね？  
二次小説なんかで、よく見るけど自分が体験するとは思わなかったな。

「それで転生先は、いったいどこだ？」

「えーっとですね。転生先は、魔法先生ネギま！の平行世界ですね」

ありがちな。

「二次小説でよくある能力なんかも貰えますよ。で？どうするんですか？転生しますか？」

「また生きられるんだ。だったら転生してやるよ」

「わかりました。あつ、ちなみに能力は10個までです」

10個までって、何気に多いな。  
能力ねえ…

……そうだ、あれにしよう！

「じゃあ、1個目は肉体の限界を無くして全盛期の状態で不老にすること。

2個目は状態異常無効化能力。

3個目は精神強化。

4個目は鋼殻のレギオスの武芸者の能力で、剋力は女王と同じくらいにしてオーロラ粒子が無くても剋が使えるように。

5個目は天剣をくれ。設定は刀と鋼系の二つで、女王の全力の剋に

も耐えられるのを復元して使えるように。

6 個目はサイハーデン刀争術に関する知識とそれを使う才能。

7 個目は剣技に関する知識とそれを使う才能。

8 個目は武器を使う才能。

9 個目はレイフォンの戦闘経験をくれ。

で、肝心の10 個目は俺が死んで悲しんでる家族を幸せにしてくれ」

俺の貰う能力では二個目と九個目のはかなり重要だ。

2 個目は最悪殺した場合精神的に病んだりしないようにするためだ。

9 個目のはいくら才能があっても経験がなければ意味がない。

とはいえ所詮他人の経験のためそこから派生していくつもりだ。

「最後のはまた珍しいですね? …… わかりました、あなたの家族は未来永劫幸せに暮らせるようにしておきます。 …… それにしても普通なら王の財宝とか無限の剣製とか、そっち系だと思ったんですけど……」

「魔法のある世界に転生するのに同じような力より、まったく別の力を持った方が面白いだろ? 」

Fate系は度が過ぎてるからな。

その分レギオスの方は力加減とか簡単そうだし…

「後、個人的にあの作品が好きだから」

原作もいいし、アニメもかつこ良かった。

「そうですか…わかりました。この10 個の能力でいいですか? 」

幼女が確認するかのように言ってきた。

「おう！」

「では、能力の設定を完了したので転生させます。では、よい戦場を」

幼女がそう言った瞬間、視界が暗転し俺は意識を失った。  
だが最後に言わせてくれ。

なぜにデルボネ？



## 第二話（前書き）

ようやくできた。

誤字・脱字があったら報告してくれると嬉しいです。

ではごじつぞー！

## 第二話

目が覚めたら……………見知らぬ部屋にいた。

「……………知らない天井だ」

ネタを言うのはそれぐらいにして……………ここどこ？  
と、しばらく呆けていたら部屋に人が入って来た。

「おや？起きたかね？」

入って来たのは柔和な笑みを浮かべる初老の男。  
見た目は優しそうな風貌だが中身は場数の踏んだ戦士のそれと、俺  
の中にあるレイフオンの経験がそう言っていた。

「驚かせてすまないね。私はザール・アストラーゼ。孤児院の院長  
だ」

「孤児院……………？ここは孤児院なんですか？」

「いや違うよ。ここはグラニクスの闘技場の治療室だよ」  
どうやらここは闘技場だったらしい。

話を聞けばザールさんは剣闘士兼孤児院の院長らしく、孤児院の経  
営に必要なお金を稼ぐ為に剣闘士をしているらしい。  
ザールさんの孤児院は空中王都オスティアにあり、オスティア行き  
の艦に帰る途中の道で俺が倒れていた為、急いでこの医務室まで連  
れて帰ったそうだ。

「そうだったんですか……世話を掛けてすみません」

「いいんだよ。私の中では日常茶飯事さ。……それにしても君は変わった子だね？」

……… いったい何の事だ？

「君のような幼い子がこうした受け答えを簡単にできる時代なんて世も末だな」

「……… 幼い……？ …… すみません鏡ってありますか？」

そう聞くとザールさんは鏡ならそこあるよと言った。  
寝ていたベッドから降りて鏡まで移動する。

今の今まで気付かなかったが立ち歩いてみると自分の目線がだいぶ変わっていることに気が付いた。

「………」

意を決して鏡の前に立つとそこにいたのは………

「（子供になってる！？というかこの顔レイフオンを幼くしたような顔じゃんか！！？）」

「どうかしたのかな？」

鏡の前で固まっていた俺を不思議に思ったのかザールさんが聞いてきた。

「い、いえ何でもありません！」

「そうかい？ならいいんだが………」

とりあえず容姿の事は驚いたが、どうしようもない為即座に諦めた。にしても、これからどうしようか？

「そつえばこれから君はどうするんだい？」

見兼ねたのかザールさんが今後の事を聞いてくる。

うくん、能力の事を知りたいんだけどそれ以前に今は安全な寝床が必要だからな。

「もしよかつたらうちの孤児院に来ないかい？」

「え!？」

ザールさんの問い掛けに俺は驚いた。

普通道端で拾った程度の子供をすぐに孤児として引き取るか？  
そう聞くとザールさんは笑いながら答えた。

「私は君達みたいな子を引き取るのもしているんだ。今更一人増え  
たつて変わらないよ」

と答えた。

結論、この人究極のお人好しだ。

とはいえ無下に断る理由もないのでその申し出を受ける。

「……………これからよろしくお願いします」

「よろしく。そつえば君の名前を聞いてなかったね？」

と聞かれて、俺は前世の名前を名乗ろうか迷ったが前世の名前は捨てる事にした。

「……レイフォン…レイフォン・ヴォルフシュティン・アルセイフ」

「それじゃあレイフォン、家に帰ろうか？」

こうして第二の人生の家が決まった。

### 第三話（前書き）

何でだろう？こっちの方の執筆が進んでしまつのは……  
ご都合展開有りですのでご了承下さい。

ではごきげん。

## 第三話

レイフォンSIDE

オスティア行き船に乗り三日。

オスティアではまだ掛かる為その間に今の自分の能力について把握してみた。

結果は……

剄の使用は一応可能。ただし戦闘を行う場合はそれ相応の鍛練が必要。

内力系活剄による肉体強化と外力系衝剄による攻撃は可能。しかし戦闘ではどちらも鍛練が必要。

なお衝剄は込める剄の量によって威力が変わる事が判明。

剄息は剄を使った為一応可能。しかし今のところ常時剄息は不可。

天剣は腰の剣帯に差してあったので、とりあえずある事はわかった。復元はまだ。

サイハーデン刀争術と剄技に関する知識は確認できた。

最後にレイフォンの戦闘経験だが、これは頭の中で見る事が出来た為問題なし。ただ一つ言える事があるとすれば………すこかった。とまあ現状確認できる物はすべて確認した。

とりあえず俺の能力は剄が使えなくちゃ意味ないので剄息の訓練をする事にした。

剋息は呼吸する際に剋脈で呼吸するような感じでやるので、剋を使う割合で訓練する事にした。

これが一日目の事だ。

そして現在あれから三日経った。

剋息の訓練はとりあえず体に覚え込ませるしかないのでひたすら意識してやっていった。

その結果……

「何てこつたい……orz」

今日の朝起きた時にはもう意識せずそれなりにできていた。

侮った。どうやら貰った才能は驚異的なまでにすごい物らしかった。

その為、昼からやる事が無くなってしまった為、どうするか悩んでいた。

「（どうする？ここは船の中だからそこまで派手な鍛練はできない。とはいえ肝心の剋息は訓練開始から三日でできたし……）」

考えた結果、天剣の復元をする事にした。

他にやる事ないからもついいよね？

実を言うと剋息をマスターするまで復元はしないと決めていたのだが……その約束も三日と持たなかった。

「（えーっと、確か設定を二つ入れていたから……）レストレーション01」

剣帯から天剣を抜き出し復元を行う。

復元された天剣の形は刀……間違いなく自分が頼んだ設定だった。



「つか、おも!？」

復元と同時に感じた重量に慌てて活剱を使ったがそれでもまだ思いを感じた。

恐らく自分の剱の制御ができていない所為だろう。

天剣を基礎状態に戻して剣帯に差し込む………まだ使うのは早すぎたようだ。

「体が成長してから武器は使うか……」

成長するまでは剱に関する訓練だけしよう。  
そう思った。

あれから二日経った。

この二日は、基本的な活剱と衝剱を主に訓練をしていた。

剱息の方は五日も経てば無意識にできるようになった。こちらについてはもはや完璧といって良い具合だ。

才能とは恐ろしい。

何せ自分が行った内力系活剱の訓練は二日でマスターできた。

とはいえこれは自分の体に活剱を流し、肉体強化を行うのでそれぐらいならばもう問題なかった。

剱技への応用はまだだがそのうち試そうと思う。

衝剱に関しては活剱同様基本的な事は可能なため、後は剱技への応用のみである。

「(マジで半端ない程の成長速度だな)」

何より自分の体がスポンジの如くこれらの技能を吸収していくのは  
自分ですら驚いている。

「(劉技と刀術の鍛練も、そう遠くはないな)」

と、自分に呆れながらオスティアに入航した。

S I D E   E N D

### 第三話（後書き）

現在のレイフォンの年齢は6歳ちょいです。

## 第四話（前書き）

ようやく書き上げられた……

更新遅れて申し訳ありません……

それではどうぞ！

## 第四話

レイフォンSIDE

朝、誰よりも早くに起きた俺ことレイフォンは日課である鍛練をするために孤児院の裏にある道場に向かった。

戸を開け中に入る。道場内はいつも通り閑散としていた。

そう感じながら修練着に着替え、模擬剣を取り出し素振りを始める。

時刻は5時00分。毎度思うんだが、前世と違ってよくこんな朝早くに起きられるな、と思った。

一時間掛けて素振りを終え、次にサイハーデンの型を練習していく。それが終わると同時にザール　　養父さんが道場にやってきた。

「おはようレイフォン」

「おはよう養父さん」

その後養父さんも修練着に着替え、模擬剣を手に取り素振りを始める。

俺も乱れた到息を整え、また素振りを始めた。

素振りが終わると養父さんが模擬剣を構えていた。無言で自分も構える。

「今日こそ勝たせてもらおうよ養父さん」

「言うようになっただなレイフォン。お前のような小童に私はまだ負けんぞ」

そうしてお互い駆け出した。

俺の名前はレイフォン・ヴォルフシュテイン・アルセイフ。

孤児院に来て今日で一年が過ぎた。

ちなみに今は7歳。

「痛ッ！」

「我慢なさい！まったく、怪我するレイフォンもレイフォンだけど、まだ歳が一桁の子に対して本気になる養父さんも養父さんよ……」

「ははは、いやすまない。柄にもなく熱くなってしまったよ」

「言い訳は無用よ。後でキツチリとお叱りを受けて貰うからね？」

あの後、養父さんとの模擬試合は、俺がボコボコにされて終わった。活剏で肉体強化を行っている俺なのだが……やはり実際に戦うのと経験とでは訳が違うためこうして毎度伸されている。

俺としても模擬試合は毎回養父さんが殺気を飛ばしてくるので、実際はそれを受けて慣れる事が目的だったりする。

まあ今回は一撃加える事ができた所為か、養父が本気になってしまい危うくポックリ逝かされる所だったが……

毎度の思っんだが、リーチを活かしてフルボッコに掛かるのやめて  
もらえませんかねえ？

俺と養父あなたさんとじゃあ、リーチに差があるから受けるダメージが違  
うのですよ？

しかも気と魔力の合成とか今回に限ってしやがって……

殺す気が！？

え？何？鍛練だからしょうがない？デスヨネー！

とまあ最近はこの感じの朝を迎えている。

俺としては正直言っただけで朝を迎えたくないんだがな。  
で、その傷を毎度治してくれるのがこちらの我が姉 黒髪紅眼

エリーナ・カルトロットである。(ちなみに美人だ)

エリ姉さんは治癒術師を目指しているので、怪我をする俺をちよ  
くちよく治してくれる。

マジ感謝です、姉さん。

「よし、終わった！ってもうこんな時間じゃない。レイフォンみん  
なを起こして来てちょうだい」

「オッケー」

怪我の治癒が済んだ後、弟妹達の部屋に向かう。

この一年で養父さんがまた孤児を引き取ったりしたので俺にも義理  
の弟や妹がいるのだ。

部屋に着き入る。

この部屋にいるのは弟達だ。

「テュール、クラム、起きろ」

そう言っつて弟達の被っている毛布を手に取り、勢いよく引つ張ったが、誰もいなかった。

「……………」

またか、と思っつたのも束の間、背後から何か飛んでくる気配を察知、その場で回転しながら避けると同時に飛んできた二つを引つ掴み布団の上に投げ捨てる。

「ぐへッ！」

「げほッ！」

「……………はあく、お前達もよくやるな」

俺より1歳年下の弟　　銀髪翡翠眼の少年　　テュールと2歳

年下の弟　　銀髪蒼眼の少年　　クラムにそう言っつた。

この2人、血の繋がった兄弟であり、街で兄弟揃ってストリートチルドレンだったため養父さんが引き取っつたのだ。

ちなみに引き取る際は俺もいた。何せその日はグラニクスから帰っつてくる養父さんを迎えに行っつた日なのだから……

ちなみに今日みたいな行動を何でテュールテュールとクラムがしたかという  
と、2人が来た数日後に養父さんが引き取っつた　　今で言えば妹

子をちよっつかい出して泣かせた為、ちよいとO H A N A

S H I し、その次の日に今日みたいな事をして来たため本気で制  
圧…………その後よく奇襲を仕掛けて来るようになった。

「……………おはよう兄さん」



「おはよう兄ちゃん！」

「テュール、クラムおはよう」

朝の挨拶を交わすと、2人はのそのそと起き上がり着替え始めた。

「着替え終わったら顔洗って来るんだよ？」

「……わかった」

「はい！」

クラムとテュールがそう言うのを聞いて、今度は妹達の部屋に行った。

・  
・  
・  
・  
・

妹達が寝る部屋の前で一度ノックをし、返事がないのでそのまま入る。

「クラリス、サリー、もう起きなさい。朝だよ」

クラリス 金髪碧眼の少女

とサリー

蒼髪オッドアイ金眼銀眼

の少女 に呼びかける。

クラリスは俺の1歳、サリーは3歳年下の妹だ。



おかずを手渡され運ぶ事になった。

キュピーン レイフォンは ごはんを はこんだ。

我が家の食事は常に命懸けだ。

大皿に載せられたおかずを分け合って食べるのだが、分け合うというよりもはや争奪戦である。

誰も彼もがこの時だけは身体スペックが均一になる。

無論俺も、武芸者の能力を使っても取れないおかずは多々あった。

なんやかんやでおかずの盛られた大皿を大テーブルの上に置き、ご飯の準備をする。

準備が終わると弟妹達も降りてきてみんな席に着いた。

そして……

『いただきます!』

と共に我が家のおかず争奪戦が始まった。

俺の名前はレイフォン・ヴォルフシュティン・アルセイフ。  
好きなものは家族である。

S I D E O U T

第四話（後書き）

次回もお楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1211y/>

---

天剣と言われた男

2011年11月22日02時00分発行